

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520185

研究課題名(和文)文学史家藤岡作太郎の研究 著作と日記の翻刻を中心に

研究課題名(英文)A Study Of Fujioka Sakutaro

研究代表者

木越 治 (KIGOSHI, OSAMU)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：10109093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：近代国文学始発期に重要な足跡を残した藤岡作太郎の日記解読が本研究の主要な目的である。明治38年～明治43年2月の彼の死に至るまでの日記については解読を終え、注を付して公刊した。現在、明治32年日記後半部の解読をすすめている。この日記に付されたメモにより日記執筆時の具体的な手順などを知ることができた。藤岡の編纂した中等学校向け国語教科書の検討を通して、明治期の国語教育における「文語」の位置について新しい知見を得ることができた。また、『李花亭蔵書目録』を翻刻して、彼の蔵書形成のプロセスを明らかにし、さらに、石川県立図書館に寄託されている現在の蔵書とつきあわせた。

研究成果の概要(英文)：This research is an interpretive study of the diary of Fujioka Sakutaro (1870-1910), a figure who left important traces in the field of Japanese National Literature. I have published, with annotation and interpretation, the entries dating from 1905 to Fujioka's death in February 1910. Presently, I am working on the entries of the latter half of 1899. Through the memos attached to the entries, as well as my transcription, it is possible to grasp concretely the process by which the entries were penned. Also, by examining the national language textbook he edited, I could come to a better understanding of the position of "classical language" within the Meiji education system. Furthermore, with my transcription of the Rikatei Collection Catalogue written by Fujioka himself, we can now analyze how he structured his own library and compare this record with the collection at Ishikawa Prefectural Library. My work thus allows us to rediscover his importance in Japan's literary modernization.

研究分野：文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：藤岡作太郎 日本文学史 近世文学史 日記 明治の文語 蔵書目録

1. 研究開始当初の背景

(1) 藤岡作太郎（明治 3 年～明治 43 年）

は、金沢に生まれた国文学者・美術史家である。彼の最もよく知られている著者は『国文学全史平安朝篇』（明治 38 年刊）であり、この書物は、何度も体裁をかえて出版されている。また、美術史家としての評価も高く、明治 36 年刊の『近世絵画史』も何度か版を変えて出版されている。しかし、早世したために（亡くなったのは満 40 歳の誕生日を迎える直前であった）、多くの著書を残したとはいえ、その全体をまとめる段階に至らないままである。没後、『帝国文学』誌で追悼特集が編まれ、昭和 15 年 4 月には、没後 30 年を記念して『国語と国文学』誌で「藤岡博士と国文学」という特集が組まれた。また、著作集も二度にわたって刊行されてはいるが、しかし、その業績が現在の国文学界に十分に生かされているとはいえない。

(2) 国文学者としての彼がめざしていたのは、日本文学全般に通暁する文学史家たることであったと思われる。著作集には、大学での講義録をまとめた『鎌倉室町時代文学史』及び『近代小説史』（内容は江戸時代の小説史）が含まれているが、たまたま指導していた大学院生が修士論文の研究対象として取り上げた江島其磧の時代物浮世草子『風流宇治頼政』（享保 5 年刊、『八文字屋本全集』第 5 卷所収）の典拠探索作業のなかで、藤岡作太郎の『近代小説史』における言及が、その後の浮世草子研究において全く無視されていることを知った。彼の近世文学研究再評価の必要性を痛感したのがこのときであった。

(3) 2007 年 4 月より、金沢大学市民大学院のなかに「藤岡作太郎ゼミ」という講座を設けることが決まった。前項で述べたよ

うなきっかけで藤岡作太郎に関心を持っていた折り、作太郎の展示室を持つ「金沢市ふるさと偉人館」館長松田章一氏より、藤岡作太郎の日記が存在することを教えられ、この日記を読む会をはじめてはどうかとすすめられたことをうけて、働きかけた結果である。早速、前年秋より市民研究員の参加者を募り、応募者 7 名とともにプレゼミと称し、試行的にふるさと偉人館 2 階の一室を利用して日記の解読作業に着手した。同年 4 月より正式に金沢大学市民大学院「藤岡作太郎ゼミ」が発足し、以後は、月 2 回、一回 2 時間の輪読形式でのゼミを開催した。約一年で明治 38 年の日記の解読を終えたので、簡単な脚注と人名索引を付し、2008 年 3 月刊行の『市民大学院論文集』別冊として公刊した。

このような活動を背景に背景にして、本研究は開始された。

2. 研究の目的

(1) 藤岡作太郎日記の解読と公刊に関してはすでに着手していたわけだが、それを継続し、没年である明治 43 年 2 月までを読み終え、年単位の分冊形式で刊行することを第一の目標とした。なお、開始年を明治 38 年からとしたのは、『近代小説史』の講義が始まった年だからである。

(2) 文学史家としての藤岡作太郎の業績をたどることが、本研究のもうひとつの柱である。具体的には、『近代小説史』の記述の検討ということであり、作太郎以前の研究状況の確認と、以後の研究に及ぼした影響を検証していく作業を試みることにした。

(3) 本研究においては、彼の著作の整理ということも重要な柱にしている。著作集には、書簡なども含まれてはいるものの、大部分は、公刊された著作と雑誌・新聞など

に掲載された文章である。しかし、石川近代文学館には、遺族から寄贈された多くの稿本類や来翰などを所蔵している。それらについては、一部の研究者にしか知られていないので、可能な限り整理し、紹介していきたいと考えている。

3. 研究の方法

(1)「藤岡作太郎ゼミ」での継続的な活動を通して、市民研究員との共同作業により日記の解説・公開を行なうことが研究方法の第一にあげるべき事柄である。おそらく研究代表者ひとりでこの作業を続けていたならば、途中で挫折したのではないかと思われる。これを継続するために、所属大学が金沢大学から上智大学に移った 2010 年以降は、月に一度金沢に出かけることになったが、そのおかげで現在も日記の研究を継続し続けているとって過言ではない。その意味で、このゼミは、本研究を推進する、最も重要なファクターになっていると断言できる。

(2)藤岡作太郎の近世文学史研究についてみていくには、藤岡作太郎ひとりを調べていってしまうのがない。明治期の日本文学史及び江戸文学史（あるいは近世文学史）にかかわる著述を網羅し、それらの記述を比較検討していくことが必要である。とりあえず、研究代表者が専攻する上田秋成及びその周辺の作家に関する記述にターゲットを絞り、その検討からはじめることにした。

(3)藤岡作太郎に関する資料の整理に関しては、金沢に赴くごとに、石川近代文学館や石川県立図書館李花亭文庫（作太郎の旧蔵書を収める）において、関連資料の調査を進めることにした。特に、膨大な分量にのぼる『李花亭抄録』の内容検討や、蔵書目録の紹介などに力を注ぎ、『近代小説

史』稿本についても研究を始めることにした。

4. 研究成果

(1)①「藤岡作太郎ゼミ」の活動母体となっていた市民大学院は、本研究 1 年目の 2010 年 3 月で活動を終了した。また、2010 年 4 月より、研究代表者である木越は、東京の上智大学に移ったので、その成果を金沢大学市民大学院論集別冊として発行することもできなくなった。この形式で刊行したのは、明治 38 年・明治 39 年・明治 40 年の三年分である。しかし、「藤岡作太郎ゼミ」の名前はそのまま残し、月 1 回、木越が金沢におもむく形でゼミを継続することにした。参加する市民研究員のメンバーには、この間、若干の変動はあったが、おおむね 7 ～ 8 人で推移してきており、日記の研究は現在もなお継続している。また、予定していた明治 43 年 2 月までの日記については、本研究費による報告書という形式により、明治 41 年及び明治 42・43 年を 2 分冊にわけて刊行した。

②本研究の始まる以前に刊行した 2 年分の日記のうち、明治 38 年には簡単な脚注を付したが、明治 39 年分には注を付すことができなかった。翻刻の形式・体裁が定まらなかったことと、内容に関する調査が不十分だったためである。その反省にたって、明治 40 年日記からは、二段組みに体裁をあらため、一日ごとに注を付する形式を採用した。これにより、形式にとらわれずに調査結果を随時追加できるようになった。また、東京に移ったことにより、図書館等での調査も容易になり、当時の新聞類をたどることにより、日記の記述を跡づけることができるようになった。また、大学関係の行事に関しては、東京大学 100 年史などが有用であることを知り、そうした情報も、すべて注として取り込むことがで

きた。その意味で、明治 41 年及び明治 42・43 年の二分冊に付した注は、自分なりに納得のいくものであると思っている。

③この種の注の例をひとつだけあげておく。日記明治四十一年十月十八日の項に「万朝の記事、大に大塚君の為には迷惑す」と出る。これは、同日及び翌日付『萬朝報』に載った「美術展覧会の顛末（上）（下）」の記事のことである。この記事を読むことによって、文展設立に至る経緯及び「正派同志会」「玉成会」結成にかかわる粉糾の経緯を知ることができ、作太郎が日記中でしばしば審査員をやめたいという意向をもらすことになった理由も判明してくるのである。

④藤岡作太郎は、明治 43 年 2 月 3 日に没するが、明治 43 年日記帳の本文欄に書き込まれているのは 1 月 29 日の記事までである。ただし、1 月 31 日・31 日・2 月 1 日・2 日までの計四日分は薄い和紙に書かれたメモのまま日記帳に挟み込まれている。他の例から推測するに、作太郎は、この日記を書くにあたって、このように数日分をまとめてメモしたものをもとに清書していたようである。旅行中は別に手帖などに書いていたようであり、大磯での静養中は、ときにこうしたメモを取らないときもあったらしい。記憶のみで書かれたときは、来信・発信欄は省略されることが多い。彼の日記の丁寧な記述は、こうした毎日のメモに基づいていることが知られるのである。このように彼が情熱を注いで日記を記録し続けたのは、彼が、この日記を、他の公刊された自分の著作物と同等の価値を有するものと考えていたことによると思われる。自作の蔵書目録のなかにこの日記が記載されていることが、そのことの証明になるはずである。このことも、日記を読むことによって得られた重要な成果であった。

⑤明治 43 年日記を読了したのは、作太

郎が日記を書き始めた明治 32 年（正確には、31 年 12 月 4 日）にさかのぼって輪読会を続けている。この時期は、作太郎の京都在住時代で、記事の多くは、展覧会で見た絵画や彫刻などの記録と批評、また近隣の寺社に参拝をかねて出かけた折りに見た美術品に関する記録などが多くを占めている。明治 38 年以降は、国文学者の日記らしい記述が多いといえるが、この時期は、美術史家としての側面が強く出ている。この時期の京都博物館における展示物の記録は、博物館には残っておらず、当時の「日出新聞」を調べるしかないとのことであった。その意味では、美術史研究の資料として重要なものと思われ、この部分の公刊に関しては、国文学系の間が担当するより、美術史の専門家に委ねた方が有意義なのではないかと考えているところである。

(2)① 2009 年は『雨月物語』で有名な読本作家上田秋成の没後 200 年にあたる。2010 年に国立京都博物館で上田秋成展を開催したが、その実行委員として事前調査を行っていた折り、上田秋成の墓のある京都西福寺の住職より一点の掛軸を示された。そこには、藤岡作太郎の名が記されていたためすぐに調査を開始した。その結果、明治 36 年 6 月にこの寺で上田秋成没後 95 年祭を営んだ折りに集まった人々による揮毫であることが判明した。さらに調査を続けていくうちに、この催しが、明治における上田秋成の発見と再評価に関して大きな意味を持っていたことが明らかになったのである。

②明治における日本文学史研究は、明治 23 年の三上参次・高津楯三郎『日本文学史』（金港堂刊）を嚆矢とするが、以後明治 36 年までに刊行されたものは約 35 点、このうち、上田秋成の扱っただけににしばってみていくと、ほとんどは、真淵門の国学者の

ひとりであり余技として『雨月物語』等の小説をものした、という程度の扱いである。藤岡作太郎が明治 34 年に刊行した『日本文学史教科書』でもそのような扱いであるが、36 年のこの催しをきっかけに、彼は秋成への関心を深めていき、『胆大小心録』の写本作成と関連論文の発表、『春雨物語』富岡本の活字翻刻（これが『春雨物語』の最初の翻刻・紹介となった）などの仕事を残し、『国文学講話』『近代小説史』等においても、非常に適切な言及を残すようになるのである。遺稿として明治 43 年 8 月に刊行された『英草紙』（富山房名著文庫）もそういう流れのなかで手をつけていたものと思われる。その遺志をつぐかたちで、作太郎の親友であった藤井紫影が大正 8 年に『秋成遺文』を刊行し、後世を裨益することになるが、その淵源がこの明治 36 年の秋成 95 年祭にあったことを知り、その研究史意義を再確認したことである。

(3) 明治 40 年～ 41 年にかけて、藤岡作太郎は中等学校用の国語教科書の編纂に従事している。日記によってその編纂過程をかたりくわしく知ることができるが、それ以上に興味深いのは、この教科書の編纂方針が使用言語（現代のように鑑賞言語でなく、実際に書くために用いていく、という意味）としての「明治文語文」の規範を示すものと位置づけていることが、教材文の選定態度に顕著にあらわれている点である。典型的な例をふたつあげてみる。ひとつは、新渡戸稲造の言文一致体による留学体験記『帰雁の蘆』中の文章を、わざわざ文語文に訳し直して収録している例である。これは、成熟途上にある言文一致体を規範とするに足らざるものとみなしていたことを示すであろう。もう一つは、芭蕉の『おくのほそ道』原文に手を入れ、適宜ダイジェストしている例である。原文至上主義の現代

においては考えられない処置であるが、実際に書くために用いられる規範としての「文語文」を示す、という意識がよくあらわれた改変といえる。近代文体の成立過程については、多く言文一致体の確立という流れのなかで論じられることが多かったと思われるが、こうした学校国語教育における、使用言語としての「文語」教育、という側面がどのような役割を果たしたかは、これからさらに検討していくべき課題であろうと思われる。

(4) 石川近代文学館に遺族より寄贈された資料については、簡単な一覧表が作成されているだけである。が、これだけでは、目録として不十分であり、今後の利用者のためにも、所蔵資料一覧を作成していく必要がある。本研究期間の間に取り上げることができたのは、自筆『李花亭蔵書目録』の紹介と、現存する李花亭文庫蔵書の突き合だけである。『李花亭抄録』全 13 巻、『近代小説史』自筆稿本、『新体国語教本』編纂にかかわる資料（校正刷りなど）についても調査はすませたが、どれも分量が多いので、発表形式を検討中である。来翰などの整理も必要であるが、これらは、今後の研究に委ねられることになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ①木越 治 自筆李花亭蔵書目録—藤岡作太郎の自己形成・その一— 上智大学国文学科紀要 査読無 第 30 号 2013 pp. 1-46
<http://repository.cc.sophia.ac.jp/dspace/handle/123456789/34910>
- ②木越 治 使える文語 上智大学国文学会報 査読無 33 号 2013 pp.17
- ③木越 治 国文学的的日常—明治の国文学者藤岡作太郎の日記から 上智大学国文学科紀要 査読無 第 29 号 2012 pp. 65-112

<http://repository.cc.sophia.ac.jp/dspace/handle/123456789/33878>

④木越 治 藤岡作太郎と上田秋成・序説
上智大学国文学論集 査読無 第 43 号
2011 pp.1-25

<http://repository.cc.sophia.ac.jp/dspace/handle/123456789/31297>

⑤木越 治 鏡花が好んだ「鬼気迫る」
北國文華 査読無 第 46 号 2010
pp.86-95

[学会発表] (計 3 件)

- ①木越 治 文語のちから—読本のことばをてがかりに—日中共同シンポジウム「日本と中国、中国と日本—文学からの接近」
2012 年 9 月 1 日 於中国・西安市、西北大学国際文化交流学院
- ②木越 治 国文学的的日常—藤岡作太郎日記を読む—金沢大学国語国文学会平成 22 年研究発表会 2010 年 10 月 2 日 於金沢大学サテライトプラザ
- ③木越 治 発見される作家たち—揺籃期の近世文学史を読む—上智大学国文学会平成 22 年度夏季大会 2010 年 7 月 3 日 於上智大学

[図書] (計 3 件)

- ①木越 治 平成二十三年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 藤岡作太郎日記・明治四十二年・四十三年
2012 pp.1-112
- ②木越 治 平成二十二年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 藤岡作太郎日記・明治四十一年 2011 pp.1-136
- ③木越 治 藤岡作太郎日記・明治四十年 金沢大学市民大学院論集別冊 第 5 号
2010 pp.1 ~ 150

[その他]

ホームページ等

<http://kigoshi.sophia.labos.ac/ja>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木越 治 (KIGOSHI Osamu)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：10109093